

静岡市美術館 PRESS RELEASE

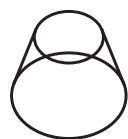
# 笠岡市立竹喬美術館名品展 うつりゆく自然を描く 小野竹喬の世界



小野竹喬《野辺》1967年 笠岡市立竹喬美術館

作品はすべて小野竹喬筆、笠岡市立竹喬美術館所蔵、展示期間の記載がないものは通期

2025年4月12日(土)～5月25日(日)



静岡市美術館  
SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

tel. 054-273-1515 (代表) [www.shizubi.jp](http://www.shizubi.jp)

展覧会担当：大石、山本 広報担当：大庭、岡田

## 笠岡市立竹喬美術館名品展

# うつりゆく自然を描く 小野竹喬の世界

近現代日本画を代表する日本画家・小野竹喬（1889—1979）。岡山県笠岡市に生まれ、明治36（1903）年に14歳で京都に上って竹内栖鳳に師事して以降、昭和54（1979）年に89歳で死去するまで75年間にわたり、日本の美しい自然を描き続けました。その制作姿勢は一貫しており、季節の移り変わりのなかで日常に目にするささやかな自然の表情を、温かい眼差しで素直に捉え、鮮やかかつ明快に表現しています。後半生では、夕焼けの茜空を題材に刻々と変化する空や雲の様相を詩情溢れる色彩で柔和に表現しました。このような生涯にわたる画業が評価された竹喬は、昭和51（1976）年に文化勲章を受章しました。

本展覧会では、竹喬美術館の収蔵作品を中心とする名品の数々により、竹喬が生涯を通して追い求めた自然表現の精華をご覧ください。

## 展覧会情報

■会期：2025年4月12日(土)～5月25日(日) ※会期中、一部展示替えあり

■休館日：毎週月曜日(4/28(月)、5/5(月・祝)は開館)、5/7(水)

■開館時間：10:00—19:00(入場は閉館の30分前まで)

■観覧料：一般1,400(1,200)円、大高生・70歳以上1,000(800)円、中学生以下無料

\*( )内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 ※障がい者手帳等をご持参の方および介助者原則1名は無料

■主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送  
後援：静岡市教育委員会 特別協力：笠岡市立竹喬美術館 企画協力：青幻舎プロモーション

## 小野竹喬略歴



- 明治22年(1889) 11月20日、岡山県笠岡市西本町に生まれる。本名英吉。
- 明治36年(1903) 京都に上り竹内栖鳳に師事。
- 明治38年(1905) 栖鳳宅の寄宿生となり「竹橋」の雅号をもらう。
- 明治42年(1909) 京都市立絵画専門学校別科に入学。
- 大正 5年(1916) 第10回文展で《島二作》が特選受賞。
- 大正 7年(1918) 土田麦僊、村上華岳、榊原紫峰らと国画創作協会創立。第1回展に《波切村》を出品。
- 大正10年(1921) 土田麦僊らとともに渡欧。イタリア、スペイン、イギリスを訪れる。
- 大正12年(1923) 雅号を「竹喬」と改める。
- 昭和 3年(1928) 第7回国画創作協会展に《冬日帖》を出品。国画創作協会第一部(日本画)解散。
- 昭和 4年(1929) 帝国美術院推薦となる。
- 昭和11年(1936) 新文展審査員に任命される。
- 昭和22年(1947) 京都市美術専門学校教授(昭和25年に京都市立美術大学)に就任。帝国芸術院(現日本芸術院)会員。
- 昭和33年(1958) 社団法人日展の発足にあたり、常務理事となる。
- 昭和41年(1966) 笠岡市名誉市民に推戴される。
- 昭和43年(1968) 文化功労者の表彰を受ける。
- 昭和48年(1973) 京都市名誉市民に推戴される。
- 昭和51年(1976) 「奥の細道句抄絵」を開催。文化勲章を受章。
- 昭和54年(1979) 京都にて死去。

# みどころ

## I. 近代京都画壇の巨匠・小野竹喬の全貌に迫る

小野竹喬の画業を顕彰するため故郷に設立された笠岡市立竹喬美術館の所蔵品より、竹喬の生涯と画業の変遷を紹介する、静岡県内初の回顧展です。《島二作(早春、冬の丘)》や《波切村》など代表作をはじめ初期から最晩年の作品まで一堂に展観します。

## II. 令和6年度新指定!重要文化財・波切村を特別出品

令和6年に重要文化財の指定を受けたばかりの代表作《波切村》と画稿2点を11日間限定で特別出品。竹喬のみならず近代日本画の風景表現の展開を考える上でも注目される貴重な作品を、指定後初めて静岡でご覧いただける絶好の機会となります。

## III. 自然や四季、時間の移ろいを捉えた竹喬の風景画

何気ない風景を題材にし、みずみずしい自然や季節の変わり目、刻一刻と変化する夕焼けや雲など、詩情豊かで美しい日本の風景を描き続けた竹喬。「風景の中にある香りのようなもの」を捉えんとした竹喬らしい鮮やかで素直な作品を本画、素描を交え120点あまりで紹介します。

### 1 竹内栖鳳塾での学び (1903-1909年・14歳～20歳)

1903年、14歳で京都にのぼり竹内栖鳳に入門した小野英吉は、師より「竹橋」の雅号をもらい、四条派の筆法と西洋近代絵画の空間表現を融合した作風を学びました。



《洛外の山家》1906年頃

栖鳳塾入門直後、貴重な初期の作例



《落照》1908年

茜空を描いた最初期の代表作  
第二回文展出品

## 2 西欧近代絵画の受容 (1910-1917年・21歳～28歳)

1909年、京都市立絵画専門学校別科に進んだ竹喬は土田<sup>ぼくせん</sup>麦僊、野長瀬<sup>のながせ</sup>晩花らと出会います。1910年には《暮るる冬の日》が美術評論家・田中喜作に好評を得て美術懇話会「<sup>ルンヤ・ブール</sup>黒猫会」(後に「<sup>ル・マスク</sup>仮面会」)の活動に参加、印象派や新南画の技法を摂取するなど探究を続け、1916年の第10回文部省美術展覧会(文展)に出品した《島二作(早春・冬の丘)》で特選を受賞しました。



《暮るる冬の日》1910年

比叡山麓より比良山を望む  
第十五回新古美術展  
三等賞銅牌を受賞

セザンヌへの憧れ  
第十回文展特選



《島二作(早春・冬の丘)》1916年

## 3 渡欧を経た、西洋から東洋への歩み (1918-1928年・29歳～39歳)

1918年、文展から離脱した竹喬は、土田<sup>さかきぼら</sup>麦僊、榊原<sup>むらかみ</sup>紫峰、村上<sup>かがく</sup>華岳、野長瀬<sup>むらかみ</sup>晩花らと国画創作協会を設立。同年開催した第一回国展で《波切村》を出品します。写実を徹底的に追求しようとはしますが、日本画における写実表現は可能かという壁にぶつかり、1921年に麦僊と渡欧しイタリア中世のフレスコ画に関心を抱き、東洋の古典絵画の見直しを期することとなります。また帰国後「竹喬」と雅号を改めました。

しけ なぎ  
時化の海と凧の海、異なる材料、技法で描き分ける



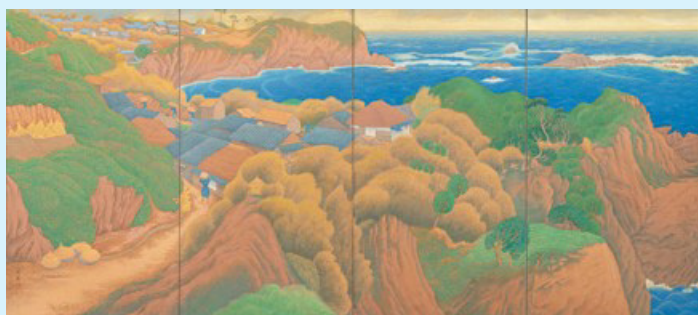
左：《波濤》、中：《青海》ともに1927年、右：《冬日帖 冬の海辺》(下絵)1928年



《冬日帖 冬の海辺》(下絵/笠岡市立竹喬美術館所蔵)は静岡会場のみ特別出品の《冬日帖》(京都市美術館)とともに展示

【ゴールデンウィークのみ展示】

令和6年 重要文化財指定! 風景表現の可能性を拓いた国画創作協会第一回展出品作



重要文化財《波切村》1918年(展示期間: 4/26-5/6)

## 4 古典絵画の見直し、南画から大和絵へ（1929-1945年・40歳～56歳）

1929年、かつて反旗を翻した官展に復帰した竹喬は南画風の点描や池大雅を意識した表現を追求します。1937年頃からは線描を主体としながら次第に簡略化された明快な画面構成へと向かい色彩を重視するようになります。また1939年の第3回新文展に出品した《清輝》は、おおらかな線描に色面で立体感を表そうとし、画業の大きな分岐点となりました。そして戦後、静謐な中に温かみのある画風へとつながっていくのです。



《清輝（習作）》1939年

のぼりゆく満月  
第三回新文展出品作の習作



《月》1944年

長男・春男の戦死  
竹喬の悲痛を物語る

戦死の報を受け取ったとき  
その魂が空にあるような気がした  
「窓外の雲」 1954年

## 5 無心の境地から生まれる絵画を目指して（1946-1965年・57歳～76歳）

このころの竹喬の作風は、造形は単純化され、象徴的な域に入っていきます。色彩は自然の微妙な表情を捉えつつも明快であり、色彩の画家・竹喬の印象を高めていきます。竹喬を代表する画題「茜空」もこの頃より数多く描かれるようになりました。戦後の竹喬は徹底した対象の単純化と象徴化を図っていきませんが、純粋な視覚体験を保持しつつ素直な心象風景を描き続けました。

京都画壇を担う  
竹喬の日展初出品作



《仲秋の月》1947年

虹色に色づく雲  
美しい素描にも注目



《彩雲》1965年

## 6 至純な心の風景への旅（1966-1979年・77歳～89歳）

竹喬は画風が固定化することを拒み、制作の上で絶えず「新鮮」ということを念じ作品を描きました。自然を「風景の中にある香りのようなもの」ととらえ、自然のささやかな息遣いに視線を注いだ竹喬の柔和で純粋な感性は、至純な心の風景へと向かいます。1976年には晩年の代表作《奥の細道句抄絵》を発表。同年秋に文化勲章が授与されました。また最晩年の竹喬は水墨画にも挑戦し1979年に89歳で死去するまで新たな創造の可能性を探究し続けました。

茜空の画家・竹喬の心象風景



《樹間の茜》1974年

松尾芭蕉の句意を風景画で



《あかあかと日は難面もあきの風（習作）》1976年

新たな創造の可能性を探究



《山》1978年